

第27回 日中戦争史研究会・議事録

2016年1月9日（土）13:00～16:30 愛知大学名古屋校舎厚生棟3階W32会議室

参加者（五十音順、敬称略）

岡崎清宜（非常勤）、菊池一隆（愛知学院大学）、菊地俊介（立命館大学）、曾根英秋（愛知大学）、田中周（愛知大学）、張鴻鵬（名城大学）、成瀬公策（名古屋市役所）、野口武（愛知大学）、長谷川満（一般）、肥田進（一般）、堀井弘一郎（日本大学）、丸田孝志（広島大学）、森久男（愛知大学） 計13名

報告1：張鴻鵬氏（名城大学大学院法学研究科博士後期課程）

「陸軍中将遠藤三郎と日中戦争―「遠藤日誌」を中心に―」

【質疑応答】（司会：森）

森：

今回の報告は張さんのこれまでの研究を一つにまとめたものです。感想、意見を発言してください。

成瀬：

集約されたご報告ありがとうございます。幾つか質問があります。①遠藤のヒューマニズムをご研究ではどのような意味で使っているのでしょうか。②この研究のオリジナリティはどこにあるのでしょうか。遠藤日誌を使ったことがこれまでと異なる点でしょうか。③私は遠藤がヒューマニズムと共にリアリズムを持ち合わせていた人物と理解していますが、遠藤の戦時国際法の理解に他の高級軍人と差があったのでしょうか。④遠藤の部隊はモラルが高かったのでしょうか。⑤ヒューマニズムと軍人という側面は戦争の場では真っ向から対立、乖離するものと思います。したがって遠藤の内的葛藤を活かすと良い研究になるのではないのでしょうか。⑥今後の研究の展望を教えてください。

張：

順にお答えします。①遠藤のヒューマニズムの意味ですが、彼は職業軍人として作戦に従事する際に、作戦一辺倒の軍人とは異なり冷静さを有しています。中国軍民に対する虐殺や蛮行を避け、兵士の命を守ります。この彼の人間的な考え方を重点的に論じています。②吉田曠二氏の著書では遠藤は戦後に平和主義に変わり、これを思想転換として解釈します。しかし私は転換ではないと考えます。彼の幼年時代・青年時代・フランス留学時代に形成された人間的側面、すなわち従来有していたヒューマニズムが、その後の彼の行動に思想に生きていると考えます。加えて私は、遠藤本人、現地軍（関東軍、支那派遣軍）、中央の陸軍参謀本部の作戦構想の三者を比較しながら、遠藤の独自性を明らかにしました。

この二点が私のオリジナリティです。③おっしゃるとおりリアリズムもあります。冷静さと合理性を有しています。対ソ強硬論者と一線を画し、国際感覚に長けています。④モラルの問題ですが、当時の彼が指揮した部隊は、従軍慰安婦を用いず、兵士の略奪行為が発生した際には厳しい処罰を下しています。日本軍の非行を防止する意図が日記からみてとれます。⑤ヒューマニズムと軍人としての冷徹さには矛盾がありますが、彼の考え方は変化します。盧溝橋事件以前の遠藤は作戦の拡大を主張する冷徹な側面が強い。その後に部隊を指揮して戦闘した時がターニングポイントで、日本軍の蛮行を確認した遠藤は参謀本部に戻り、日本軍兵士のモラル崩壊の問題、虐殺を避ける方法を模索し、ヒューマニズムの側面が強くなります。⑥今後の研究課題は、当時の日本の対ソ作戦構想の中で、遠藤の構想の特徴・独自性を明らかにすることです。

森：

張さんの博士論文の全体的評価をめぐる論点がいくつか提起されました。他に意見のある方はおられますか。

長谷川：

遠藤の陸軍における立場はどのようなものでしょうか。次に、石原莞爾との関係が今ひとつわかりません。レジュメには対立とありますが、実際はおおむね石原に賛同しているのではないのでしょうか。

張：

遠藤は当時の皇道派と統制派のどちらにも属していませんが、考え方は皇道派に近いといえます。石原からの影響が強く、満洲国を拠点とする対ソ戦論者と言えます。次に石原との関係ですが、二人は同郷で幼少期から親しい関係であり、遠藤の思想に与えた石原の影響は大きいです。もちろん遠藤は満洲に派遣された当初、参謀本部の不拡大方針に基づいて関東軍のさらなる作戦を阻止する立場をとり、石原は対立していました。しかし遠藤は北満視察後にソ連の不干渉を確認してから、関東軍の北満出兵に同意します。また満洲事変後に遠藤は五族協和・王道楽土の理想、石原の満洲国構想に賛同しています。加えて盧溝橋事件以降は石原の影響を受けて遠藤は不拡大派です。この三つの面で遠藤は石原の構想に賛同しています。

堀井：

三点質問します。①レジュメ 9 頁の「七了口上陸作戦」に関してですが、この作戦の後すぐに遠藤は現地から離れて帰国したようですが、彼の作戦案がこの作戦の成否を決定したと理解して良いのでしょうか。②重慶戦略爆撃に関して、遠藤はその非人道性を認識したとありますが、軍事合理性から唱えた重慶爆撃の批判とは異なり、非人道性とはどのような

な形で主張していたのでしょうか。③結論部分で、彼のヒューマニズム的な性格を作った生来の優しい性格を挙げていますが、「生来の」といえるだけのエピソードは存在するのでしょうか。

張：

①七了口上陸作戦案について、これは遠藤の元上司にあたる今村均による様々な軍事情報を最終的にまとめた作戦案です。七了口の戦略性（敵の防備が手薄で意表をつく上陸地点）、および上陸時期・気候分析の結果が作戦の成功を導き、遠藤の作戦案が決定的な勝敗の要因となりました。②遠藤の重慶爆撃無用論に関して、中止を求める理由はいくつかあります。戦略物資の消耗・損害にみあう戦果が得られない事や、無差別爆撃の非人道性を総合的に分析して爆撃無用論を提出しました。③生来の優しい性格については、少年時代から同志・同僚を一度も殴ったことがなかったといえます。

菊池：

日記の文章を引用していないのが問題です。遠藤の出身地の鶴岡周辺からは大川周明や数々の著名な陸軍人士（東条英機、板垣征四郎など）を数々輩出しています。その人脈の中に遠藤三郎をはめ込まないと、石原と子供の頃から親しかったと言うだけでは話になりません。張さんのご発表を何度も伺っていますが、最初からヒューマニズムが問題にされてきました。依然としてヒューマニズムが問題になっています。遠藤の戦前・戦中の考えを日記から引用すべきで、戦後の平和主義から戦前を説明しようとするから誰も理解できないのです。きちんと論じる必要があります。それから、細菌兵器を今は使用できないと言っている、レベルが達すれば使用する可能性はあります。重慶爆撃についても当時の日本軍の航空隊の力量では攻略はそもそも無理なのです。日本軍兵士の命を考え、中国民衆の命も考えたというならば、その証拠を是非見せてほしい。優しさの証拠を次々に出せばある程度は理解できます。

森：

幾つか質問します。第一次世界大戦が終わってから仏独に留学した軍人はたくさんいますが、洋行した軍人が感じたことは第一次世界大戦を契機として戦略・戦術が全く変わってしまったことです。明治以降の日本軍の装備・戦術ではとても対応できず、新しい戦略・戦術を構築する必要性を感じた人が多いのです。遠藤は作戦参謀として頭角をあらわしますが、留学で何を吸収したのか。そのことに言及した記録はありますか。遠藤の軍事思想に根本的な影響を与えたという評価はできますか。例えば永田鉄山はドイツに留学して総力戦に関する大きな教訓・インパクトを受けて帰国しました。

張：

彼はフランスの空軍大学で半年勉強しました。彼のフランス留学時代の経験がその後のキャリアに影響を与えたと思います。遠藤は重慶爆撃と太平洋戦争の時期に第三飛行団の団長として実戦部隊を指揮しました。

森：

遠藤が一番華やかであったのは参謀本部の作戦班長であった時期です。作戦班長は帝国国防方針に基づいた年度作戦計画を作成する責任者です。その際にフランス留学の新しい知見が影響してくるのではないのでしょうか。軍事思想の根幹にかかわる影響を受けたと評価できる気がしますが、これを立証する資料はありますか。

張：

私の論文は満州事変後に重点をおいておりますので、この点には詳しく触れていません。

菊池：

フランスはかなり航空戦術が進んでいるはずですが。遠藤が留学先の航空学校で何を学んで、どのように考えて、どうしたのかを分析することが重要です。それがわからなければ航空学校がどのような方針で、何を教えていたかを探する必要があります。

張：

太平洋戦争の際に遠藤は辻政信とともに空軍と地上軍の共同作戦を行いました。1943年以降は小型戦闘機を大量生産しアメリカの航空部隊と決戦を行う構想を持ちましたが、これは東条英機の大型戦闘機にたよる構想と対立しました。その際も遠藤のフランス留学時代の経験が役割を果たしたと考えます。

岡崎：

大型戦闘機とか小型戦闘機は何を指していますか。爆撃機のはなしでしょうか。

張：

専門に研究していませんので、具体的な戦闘機の詳細は説明できませんが、遠藤は戦闘機の数でアメリカに対抗する構想を持っていました。

森：

満州事変期の石原と遠藤の関係で、遠藤が満洲国に派遣された際には、中央から妨害しに来たとして非常に冷遇されます。当初は石原と遠藤の関係は険悪であったはずですが。その後どのようにして両者が接点を持つようになったのか。それから石原は当初満蒙領有論であったのが、満州事変の直後に民族協和・王道主義へと思想的転換を遂げます。遠藤自

身も満洲現地で次第に考えが変わっていきます。つまり両者とも考えが変わっているわけで、単純な話ではなくて、変化する石原の認識のもとで、遠藤も変わりつつあるという具体的な様相を掴む必要があります。

予定時間を超過していますので、張さんの報告は以上とします。

報告2：菊地俊介氏（立命館大学大学院文学研究科博士後期課程）
「日本の対華北占領統治と新民会の提唱する教育・社会の近代化」

【質疑応答】（司会：森）

森：

今日はいわば宣撫工作のイデオロギー面における思想的検討を報告してもらいました。意見・疑問点がある方は積極的に発言してください。

岡崎：

二つ質問があります。①女性論に関して、新民会の自由恋愛や自由結婚の議論は日本の言説の直輸入ではないかという印象を受けますが、軍に協力するだけの傀儡ではないという議論になりうるのでしょうか。②繆斌の女性が置かれている状況に対する認識について、女性の労働をすすめています。当時働く女性は多く存在しました。彼の認識は現実から離れているのでしょうか。

菊地（俊）：

①日本の議論の直輸入について、新民会の出版物には日本の研究・議論に関心を持ち、参考にしていることは考えられます。しかしそれが日本軍の意向に沿っているか否かは別の問題です。文化的な面で近代化に利用できるものは利用するという中国人の意図があったと思います。②女性に対して投げかける言説について、都市の青年・女性に向けての発言か、農村の青年・女性に向けての発言かを分けて考える必要があります。今後の課題とします。

丸田：

執筆者の背景に関して、各種刊行物など議論をしている人たちはどこで教育を受けて、日本占領期以前に何をしていたのでしょうか。中国人自身の近代化の流れの中で、占領下にあってもなんとか活動を進めた人々なのか、あるいは親日的で日本留学経験のある人々であったのでしょうか。次に、新民会のいう儒教文化は伝統文化の一部であって民族文化ではないという印象を受けます。中国の共産党や国民党が本気で行う民族利用とは異なると思います。全体的に彼らの議論からは、現実を知らない人々が頭で書いているという薄

さを感じます。

菊地（俊）：

執筆者の背景について、名前がわかる範囲では新民会で指導的な立場にある人たちが多くいます。ジャーナリスト、政界の人などです。日中戦争以前からの女性解放運動の指導者もいます。日本の敗戦後は言説を一変させて華北の新聞などに論説を出す人もいます。今後個別に追っていかれると思います。

丸田：

戦時動員の要請と総力戦をどの様に関わらせて議論が結べるでしょうか。封建的なものを排除しながら、国家に均質に結びつく人々を作る要請があるので、古い道徳・社会の仕組みは壊される必要があります。総力戦論との関わりで日本の統治はどのように理解できるのでしょうか。このような点から将来的に大きな議論ができれば面白いと思います。

菊地（俊）：

青年動員、女性動員を実際にみていくと、最終的には階級差をなくす議論に結びつきます。最初、新民会は動員の対象を絞っていますが、戦争末期になるとあらゆる人々を動員して階級差をなくすことを目指します。実際にできていたかは別として、変化が生じています。

丸田：

日本も戦時中は様々なスローガンを作ります。えてして知識人の言葉は大衆に届きにくいものですが、新民会は大衆動員に結びつく、庶民の心に届くわかりやすいスローガンを作っていたのでしょうか。

菊地（俊）：

新民会のスローガンについて、正直、庶民にとってのわかりやすさを感じません。新民会の考え方としては、スローガンだけ発していてもだめで、実際の生活を豊かにすることに重きを置いていたようです。

堀井：

ご報告から、侵略と抵抗の視点とは異なる中間の人々の視点の大事さを感じました。女性についての話で今までの理解とは異なる側面が見えてきましたが、実際にどの程度下層社会に浸透して、効果があったのかを検証する必要があります。私の勉強した限りでは新民会の活動はほとんど空転していました。形の上では1945年で200－300万の会員がいましたが、民衆の生活に根差した、下層社会に届く一定の効果が存在したか否かを窺いたい。

菊地（俊）：

下層社会への浸透について、今回用いた資料からは、戦争が終わるまで同じことを言い続けていると感じます。社会は変わっていなかったのではないか。新民会の動員についても民衆は嫌がって逃げています。実際は民衆から信用されていなかったと思います。

菊池（一）：

①ここに参加しているのは五四運動の参加者ではないか。議論に共通性が見られます。さらには蒋介石の新生活運動との関係性も見られ、これらを意識しながら強引に作ったのが今日の話ではないか。新民会の根本を作った人間に、実際に学生運動に関わった人々が参加している可能性があります。したがってものすごい矛盾が存在します。②時期区分の問題で、臨時政府で1945年まで強引に話を持ってきているが、区切った方が良いのではないのでしょうか。臨時政府がなくなり、維新政府があつて、つまり汪兆銘、蒋介石、臨時政府、日本のそれぞれの儒教政策との相互比較を行えば、話がダイナミックになって面白いと思います。それと同時に先ほど述べた五四運動との関係ですね。③傀儡か否かの話はひとまず捨てて、実際に話を積み上げてから最終的に判断した方が良い。同じ政権でも日本との関係は傀儡、協力、抵抗があつて時期によって変動します。④参加者の服装も運動の性格を判断する決め手になると思います。

菊地（俊）：

傀儡かどうか性急には論じないつもりです。他の汪兆銘政権や蒋介石との比較はこれからの課題とします。

成瀬：

資料に青年や青少年と出てきますが、日本でいう青年団運動に近いのでしょうか。どのような性格をもった雑誌・新聞なのでしょう。加えて雑誌を出していたということは、生涯教育、社会教育的な観点をもって活動していたのでしょうか。

菊地（俊）：

日本の青年団とは性格が異なります。雑誌を出す以外には、講演会、ラジオ放送、作文コンテストの開催などの活動を行っていました。

森：

レジュメの4頁に「新民会の変遷」の年表があります。1937年の設立から1939年の改組に至る途中の経緯がほとんど説明されていませんが、このあたりの時期は非常に重要な問題です。新民会の基本的イデオロギーを作ったのは山口重次です。山口は協和会の活動

に幻滅して日本に帰国しますが、その際に石原莞爾の要請を受けて新民会の設立準備に参加しています。そして実際にそのイデオロギーを実践したのが小澤開作です。したがって初期のイデオロギーは協和会の色彩が強い。協和会は途中で変質しますが、それに飽き足らなかったメンバーがよりどころとしたイデオロギーは東亜連盟の思想で、石原の思想が相当強く入り込んでいます。この時期の新民会のイデオロギーを見ると、何をやろうとしていたかが明確になるはずで、その後、新民会から旧協和会の会員が排除され、新民会は軍の手先として宣伝宣撫工作に従事して、イデオロギー的なある種の後退が見られます。今日の報告で足りなかったのは、1937年12月から1939年9月の間の時期の経緯で、その中におけるイデオロギーの変遷を押さえる必要があったと思います。

菊地（俊）：

この時期の新民会本体のイデオロギーの変遷については今後詳細に詰めたいと思います。

森：

汪兆銘政権も辻政信の影響があって、東亜連盟に傾斜していきます。満洲国に協和会があり、華北に新民会がある。したがって東亜連盟の影響は一時期相当にあります。東亜連盟という視角で見ると統一的な分析ができるかもしれません。

森：

以上で終わりといたします。次回研究会の候補日は4月23日です。

以上